

誨は無いですよ。」と伺っておりました。しかし、初めての教誨の直前に、担当の刑務官より「本日の教誨は死刑囚2名との個人教誨です。」と告げられ、平静を装ってはおりましたが、痺れるほどの緊張感を感じたことを今でも覚えております。

時間となり、担当刑務官の先導で独房に挟まれた廊下の先にある教誨室に案内され、「それでは教誨対象者を連れて参りますのでしばらくお待ち下さい。」と一人教誨室に残された時、不安と緊張はピークに達しました。

教誨室には祭壇があり仏教系の教誨の時には阿弥陀さんのお軸が下げられているのですが、阿弥陀さんをジッと見つめているうち、自分でも不思議なほど冷静になり、部屋の扉が開く頃には、とにかく教誨を続けてもらう為にどうしたら願箋を出し続けてもらえるか、今日は次に繋げることに徹しよう。と思えるほどに落ち着きを取り戻せていました。

最初の教誨対象者と対峙した時、とても驚きました。なぜなら彼がずっと笑顔だったからです。ニコニコと屈託の無い笑顔。そして彼の願いは自分が殺めてしまった被害者の供養でした。私は彼の心情を推し量ることができぬまま阿弥陀如来に向き直り、香呂の乗った経机を挟んで彼が座ります。その状況に緊張しつつ、真摯にご供養を申し上げました。そして供養を納め振り返ると、彼は脂汗をかいてブルブルと震えていたのです。おもわず私が「大丈夫ですか。」と声をかけると。「あれ、おかしいな、どうしたんだろう。どうしたんだろう。」と震えと脂汗の止まらない彼を見て、初めて彼が自らの罪の重さを感じ、被害者に対する謝罪と菩提を弔う心があることを知りました。

しばらくすると彼も落ち着きを取り戻し、独房へと戻って行きました。間を置かず二人目の教誨対象者が入室してまいりました。

彼はそれまで多くの教誨師から色々な宗教宗派の教誨を受けていて、宗教に対してとても博識でした。特に死後の世界、各宗教宗派の死生観に関してとても詳しく、最初の教誨でも真言宗の教え、死生観についての話となりました。

死刑囚は自ら願わない限り刑務作業はありません。毎日膨大な時間、いつ“その時”が来るのか分からない中、自らも“死”と向き合うこととなります。ですから“死”に対して非常に敏感なのです。ですから彼からの質問には容赦や遠慮がありません。その日の問答の最後に、「世界にはキリスト教やイスラム教のような一神教と、仏教やヒンドゥー教のような多神教があって、それぞれに信じる神仏が違い、死後の世界も違う。結局宗教は人間が想像で作り出した妄想じゃ無いのか。」という問いを受け、「その人が信じている宗教がその人にとっての本当の宗教なんだ。」と答えになっているのか分からない返答をしたのを覚えております。

この日の二人とは今も教誨が続いております。彼らとの時間は常に真剣勝負、私も彼らと会うたび僧侶として人として成長をさせて頂いております。

また、拘置所は個人教誨だけでなく、願箋を出した懲役受刑者との集団教誨もあります。彼らはいずれ外

の世界へと戻っていくので、それからの人生がより良くなるよう、外で生きていくためのヒントとして仏の教えを伝えます。

たとえば、「あなたが怒りの感情に駆られカッとなった時、心を静めてお不動様の真言を1回お唱え下さい。そうすれば怒りにまかせてつい手を出すことや、人を傷つける言葉を口にするともなくなりますよ。」といった感じです。

これからも彼らに自らの罪にしっかりと向き合ってもらい、悔い改めることで残りの生を充実したものにできるよう、そして心安らかに死を迎えられるよう、彼らの話を聞き、仏の教えを伝えていこうと思っております。

教誨活動は無償の行為ではありますが、何かを成すには資金が必要です。もし教誨活動にご協賛いただける方がいらっしゃいましたら、お声がけいただければ幸いです。

現在、新型コロナウイルスも感染拡大が続いております。皆様どうかお一人お一人がしっかりと対策を講じて頂き、日々ご清栄にてお過ごし下さい。

当山ではこれからも皆様の息災とロータリークラブの発展を祈念いたしております。本日は最後までお話を聞かいただき、ありがとうございました。



＝御礼の言葉＝（岡田雅隆会長）

大藪様、本日は本当にありがとうございました。大変なお仕事に携わって見えると思いますが、これからもご活躍を応援しております。

また、皆さんにお伝えしたいことがあります。現在成田山では食事の提供はしていないそうです。そんな中、この信徒会館でこのように筍ご飯を出していただき、今日はスペシャルでございます。併せて感謝申し上げます。ありがとうございました。

